

新美南吉の詩～〈感傷〉と〈心の日なた〉

藤 田 晴 央*

Poetry of Nankichi Niimi

～ Sentimentality and warm-heartedness ～

Haruo FUJITA*

| | |
|------------------|------------------|
| Key words : 新美南吉 | Nankichi Niimi |
| 詩 | Poem |
| 赤い鳥 | Akai Tori |
| 感傷 | Sentimentality |
| 心の日なた | warm-heartedness |

新美南吉は『ごんぎつね』⁽¹⁾などの童話により童話作家として知られている。しかし、本来、南吉が詩人であることは今では余り知られていない。雪景色の中の狐の母子を描いた『手ぶくろを買いに』⁽²⁾によく表れているように、その童話は詩情に溢れている。南吉文学の核心はその〈詩〉にあった。そこで、ここでは詩人としての新美南吉の創作の内容とその特徴に分け入ってみたい。

南吉は1928年（昭和3）、旧制半田中学校⁽³⁾二年生（15歳）の時に校内誌に詩を発表してから生涯に二百篇余りの詩篇を残している。15歳からの旅立ちは早熟な文学少年であったと言えよう。南吉はこの後、当時全国の文芸愛好家から注目を集めていた児童文学誌「赤い鳥」⁽⁴⁾への詩（童謡）の投稿を積極的に行い、これが彼の人生を決定づけている。童謡欄の選者は当時大きな支持を集めていた詩人・北原白秋⁽⁵⁾。南吉の詩は、「赤い鳥」の1931年（昭和6）5月号から、白秋が選者をおりる1933年4月号まで二年間で23篇が採用されており、ならずとほぼ毎月一篇の計算となる。童話だけでなく、「詩人・南吉」は「赤い鳥」が売り出す期待の詩人だったことがうかがわれる。

「赤い鳥」への初めての掲載作は次のようなも

のだ。

窓

窓をあければ
風がくる、風がくる。
光つた風がふいてくる。

窓をあければ
こゑがくる、こゑがくる。
遠い子どものこゑがくる。

窓をあければ
空がくる、空がくる。
こはくのやうな空がくる。

初掲載作ながら、言葉の調子がよく整えられている。既によく書き込んだ人の筆である。「光つた風」という表現が巧みだ。日常と郷愁を混在させた二連目でバウンドして、三連目には「こはくのやうな空がくる」となる。修辭的には「やうな」というのは直喩の言い方だが、単に夕焼けの色を表しているのではなく、心象の色を伝えているという点において意味的な技法としては暗喩である。

この詩にもあるが、南吉の詩には「光」がよく登場する。北原白秋が「赤い鳥」の選者をした最後の号に採用された作品はタイトルも「光」だ。

* 東北女子大学

光

畑の光のなかにゐる。
黒い土をば耕^{かへ}してる。

町の光の中^{かへ}にゐる。
馬をつないで売つてゐる。

窓の光のなかにゐる。
紡^{つむぎ}ぐるまをまはしてる。

くらい光のなかにゐる。
鋤で金鑛たゝいてる。

——人は光りのなかにゐる。
神も光ののなかにゐる。

前作にくらべると手法的に高度になっている。ここで南吉は、「光」という言葉のカプセルに乗りながら、視点の移動を巧みに行っているのである。中でも「くらい光のなかにゐる。／鋤で金鑛たゝいてる。」という二行が鮮やかに光っている。並べた四連ともに、庶民の生活や労働の一コマを伝えているところに、南吉の働く者に寄り添おうとする姿勢がみえる。最終連には、光に対しての信仰的な思いさえ感じられる。

この、生活や労働に対しての親近感はどこからくるのだろうか。やはりそれは、南吉の家庭環境からくるものであつただろう。南吉の父⁽⁶⁾は畳屋を営む職人であつた。私も半田に保存されている実家を訪ねたが、道路からすぐのガラス戸の向こうに、父が畳を縫う姿が見える家だつた。その父を描いた詩がある。

父

わが父は われを棄てしをみなが
嫁ぎゆく地主の家の
畳縫ひたまふ
なりはひなれば 寒き夜を

ともしびかゝげ
力をこめて ひたに
縫ひたまふ
わが子は貧しきが故に
見棄てられしと思はば
父の口惜しさいかばかりならむ
されど父よ
人な恨みぞ
まことはわれのかのをみなを
愛すること少なかりし故ならむ
げに父よ
心して縫ひたまへかし
その青き畳の上に
春立ちかへるころいとなまれん かの
をみなとかれが夫の生活に
よき日はあれと祈りつつ。

1935年（昭和10）、南吉22歳の時の作品。どこかに発表する意図はなく、「詩稿ノート」の中にあつたものだ。南吉には当時、相思相愛と思つていた女性があつたが、結婚にいたることなく女性とは別の男性に嫁いでいった。

ラストの四行が恋を失つた青年の思いとして傷ましい。けれど、南吉にはそうした傷心を、発表を意図しない詩を書くことによって乗りこえてゆく精神的な力があつたとも言える、それを示す作品だ。

母について記した詩もある。南吉の母⁽⁷⁾は南吉が4歳の時に病死している。また、南吉には生まれて間もなく亡くなつた兄があり、本名の正八はその兄の名前であつたという。南吉には、亡くなつた兄の分まで生きてほしいという期待が課せられていた。

春風

——母死にまして二十年
兄も亦幼にして逝けり

お母さん あなたの弟は

春 乳母車にのつてやつて来る
 わたしが戸口に凭れて
 埃を追つて春風を見てると
 あなたは乳母車に乗つて
 私の兄さんに押させて来る
 お母さん あなたは
 やさしい仏様達の國から
 来たのに
 大きな明るい蓮の花の傍から
 来たのに
 何といふ貧しさでせう
 (後略)

これは、1937年(昭和12)5月25日の日記によれば、実際に、患っているような母親を二人の子どもが乳母車に乗せて通ってゆくのを見たとあり、わざわざ日記に記すのだから、よほど心に残っていたのであろう。しばらくのちに「詩稿ノート」に書いている作品である。南吉は、母を亡くしてまもなく父が再婚、継母に育てられたが、実母を恋い慕う気持ちはずっと持ち続けたようだ。『手ぶくろを買いに』などの童話にも母性を求める心根は強く表れているが、詩篇にもその母恋いがうかがわれる。

南吉は学業成績こそ優秀であったが、体は虚弱であった。1933年(昭和8)、二十歳の時の徴兵検査では「丙種」。また、この歳に最初の咯血をしている。そのような人間が自己をどのように認識していたか、それが描かれた詩がある。

墓碑銘

この石の上を過ぎる
 小鳥達よ、
 しばしここに翼をやすめよ
 この石の下に眠つてゐるのは
 お前達の仲間の一人だ
 何かの間違ひで
 人間に生まれてしまつたけれど
 (彼は一生それを悔ひてゐた)

魂はお前達と
 ちつとも異らなかつた
 何故なら彼は人間のゐるところより
 お前達のゐる樹の下を愛した
 人間の喋舌る憎しみと詐りの
 言葉より
 お前達の
 よろこびと悲しみの純粋な言葉を愛した
 人間達の
 理解しあはないみにくい生活より
 お前達の
 信頼しあつた
 つつましい生活ぶりを愛した
 けれど何かの間違ひで
 彼は人間の世界に
 生れてしまつた
 彼には人間達のやうに
 お互いを傷つけあつて生きる勇氣は
 とてもなかつた
 彼には人間達のやうに
 現実と闘つてゆく勇氣は
 とてもなかつた
 (後略)

「詩稿ノート」の表題の下に「昭和10.8.31」と記された詩篇。南吉22歳の夏。1935年、東京外語学校四年。これからの進路を考えながら、自己をみつめている詩であろう。

一見、気弱な文脈だが、逆に言えば、南吉の詩人としての自覚は高まっていたと思われる。

1936年(昭和11)、東京外語学校を卒業した南吉は間もなく体をこわし、二度目の咯血をして、11月には半田に帰郷。二年間の失意の日々をおくる。

そんな南吉に人生の転機が訪れる。1938年(昭和13)、中学時代の恩師の尽力もあり、安城高等女学校⁽⁸⁾の教員になった。ここで、南吉は、生涯でもっとも充実した五年間を過ごす。それは一方では死に向かう五年間でもあったのだが。

ここで、南吉は、英語だけでなく、自ら希望し

て作文を受け持ち、生徒たちに〈詩〉を伝えている。この安城女学校で女学生たちと触れ合ったことが、南吉の生気を蘇らせたのだろう、この安城時代に多くの清新な詩を残している。

春の電車

わが村を通り
 みなみにゆく電車は
 菜種ばたけや
 麦の丘をうちすぎ
 みぎにひだりにかたぶき
 とくさのふしのごとき
 小さな駅々にとまり
 風呂敷包み持てる女をおろし
 また杖つける老人のをせ
 或る村には子供等輪がねをまわし
 或る村には祭の笛流れ
 ついに半島のさきなる終点に
 つくなるべし
 そこには春の海の
 うれしき色にたゝへたらむ
 そこにはいつも
 わがかつて愛したをみなをりて
 おろかに心うるはしく われを
 待つならむ
 物よみ 草むしり
 小さき眼を黒くみはりて
 待ちてあらむ
 われ けふも みなみにゆく電車に
 わが おもひのせてやりつれど
 その おもひ とゞきたりや
 葉書のごとくとゞきたりや

私の暮らす北国とはまったく違う気候風土がここにある。黄色い花がどこまでも広がる菜種畑や駿河灘のおだやかな海の色が目に浮ぶ。自分が愛した女性が今も自分を待っていそうな気がするという心地よさに溢れた詩である。それでいて、恋は成就しない。ただ「思い」を届けたいと願う

せつなさがただよっている。

指

指つつこんだ子が
 云つて来る
 その指出しなさいと
 わたしがいふ
 まだととのはぬ
 冷たい指
 わたしがぐつと
 ひつぱると
 その子がよろける
 ヨヂム塗つてやる
 おかつば頭下げて
 いつてしまふ
 足音が廊下のはてで
 消える
 わたしはまだ若い
 教師
 あの指握つた掌を
 そつと開いて見る
 なあにわたしは
 たゞの教師
 これは窓から流れ入る
 金木犀の
 織い香、

「春の電車」と同じく1939年(昭和14)の作品。気にかけている生徒がつき指をしたささやかな出来事からのやりとりが、大切に描かれている。最後の金木犀に向かってなめらかに言葉が流れている。昭和初期、女性は16歳くらいから見合い結婚するのが一般的な時代である。教え子は十分に結婚対象であったし、生徒からみても二十代の青年教師は、有力な恋愛対象であった。

しかし、宿痾の病は撤退したわけではなかった。南吉は、1942年(昭和17)、一年生から持ち上がりで担任した19回生を卒業させたあと、多くの童話を書いている。この年から翌年にかけて

て、南吉は三冊分の童話集の原稿をまとめている。

1943年（昭和18）2月12日、書き溜めた原稿を親しかった児童文学者・巽聖歌⁽⁹⁾に送付、3月22日に亡くなっている。喉頭結核であった。まだ29歳であった。そして、日本はすでに長く続いていた戦争の絶望的な局面に突入してゆく。

戦争が終わって三年目の秋、安城高等女学校の敷地に新美南吉の詩碑が作られた。教え子たちと同僚教師の尽力によるものだった。

一年詩集の序詩

生れいでて
舞ふ蝸牛の
触角のごと
しづくの音に
驚かむ
風の光に
ほめくべし
花も匂はゞ
酔ひしれむ

1939年（昭和14）2月、生徒たちの詩集『雪とひばり』の「はじめに」として南吉が書いた作品である。デテムシはカタツムリの三河地方での言い方であるという。「風の光に／ほめくべし」という二行に詩人・南吉の冴えがある。風に光があり、それによって火めく＝熱気をおびるべしというのである。

敗戦からわずかに三年、まだ全国各地に焼け跡が残り、多くの死者や戦傷者を出した痛手から何とか立ち上がろうとしていた時期。南吉は今のように有名な文学者ではなかった。そんな中で教え子や同僚教師たちが詩碑を建立した意義は大きい。彼らがいかに南吉を詩人として認識していたかということと、何よりも戦後復興の徴として、南吉の詩心こそを顕彰したかったということである。

振り返ると、南吉の文学には詩にも童話にもあ

たたかい〈心の日なた〉が流れている。それは、ここ津軽などとはまったく異なる半田や安城の明るさからくるものではないのだろうか。

そんな風土に生まれながら、実母を早く失い、当時は不治の病であった結核に悩まされた南吉には、弱い者、淋しい者に寄り添う精神があった。そんな南吉が求めたものが〈心の日なた〉である。

私は「詩の核心は〈感傷〉である」と常々考えている。まさしく新美南吉は〈感傷〉の人であった。人生がすこやかな時も、挫折にある時も〈感傷〉からその作品を紡ぎだした。その中に〈母性〉への憧憬もある、女性への恋情もある、庶民的な生活者を重んじたり、弱者や小さな生き物をいたわるヒューマニズムもある。その〈感傷〉は、新美南吉という人格を支えていた。感傷的であるということは少しも恥ずかしいことではない。〈感傷〉がその人間を支え、豊かにし、病によって命つきるまでもっともよき伴侶として、作品としての〈心の日なた〉を作る。新美南吉は何よりも詩人であった。

貝殻

かなしきときは
貝殻鳴らそ。
二つ合わせて息吹きこめて。
静かに鳴らそ、
貝殻を。

誰もその音を
きかずとも、
風にかなしく消ゆるとも、
せめてじぶんを
あたためん。

静かに鳴らそ
貝殻を。

1934年（昭和9）12月に書かれたと推定されている詩。南吉21歳。すでに一回目の咯血をし

ながら、文学で身をたてることも心ひそかに考えていたころの作品である。南吉の〈感傷〉と求め続けた〈心の日なた〉がここにある。

[注]

- (1) 『ごんぎつね』は「赤い鳥」1932年1月号に『ごん狐』として発表された。ここでは、現在、児童図書として一般的に使用されている『ごんぎつね』と表記した。
- (2) 『手ぶくろを買いに』は1943年、大和書店から刊行された童話集『牛をつないだ樁の木』に『手袋を買いに』として収められた。ここでは、現在、児童図書として一般的に使用されている『手ぶくろを買いに』と表記した。
- (3) 南吉は1913年、愛知県知多郡半田町（現・半田市）生まれ。
- (4) 「赤い鳥」は鈴木三重吉が創刊した童話と童謡を中心にした児童雑誌。1918年7月創刊、1936年8月廃刊。
- (5) 北原白秋（1885-1942）は詩人、童謡作家、歌人。近代日本を代表する詩人の一人。
- (6) 父・渡辺多蔵。南吉は八歳で新美家の養子となるが数か月で実家に戻り、渡辺家で成長してい

る。

- (7) 母・りゑ。南吉が4歳の時病死。兄・正八は生後十八日で夭折。
- (8) 安城高等女学校は愛知県安城町（現・安城市）にあった。現在、その場所は市立桜町小学校となっている。
- (9) 巽聖歌（1905-1973）は童謡詩人・歌人。童謡「たきび」の作詞者である。

〈参考資料〉

- 『校定・新美南吉全集』（大日本図書）
『新美南吉詩集』（ハルキ文庫）
斎藤卓志『素顔の新美南吉』（風媒社）
西田谷洋『新美南吉童話の読み方』（双文社出版）

- (※) 引用詩は『校定・新美南吉全集』を参照したが、漢字は解釈に影響を与えない範囲で、新字体を取り入れた（例：終點→終点）。